

ネットワーク時代の図書館サービス： アメリカ大規模大学図書館見学記

①スタンフォード大学

附属図書館参考調査掛 山中節子

1. はじめに

「平成10年度京都大学後援会助成金第Ⅰ類第Ⅰ種（海外派遣）」の助成によりアメリカの大学図書館を見学する機会を得た。訪問先は、スタンフォード大学、カリフォルニア大学バークレー校（UBC）、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）の3校、期間は7月1日から2週間であった。また、時間の合間を縫ってサンフランシスコ公共図書館、ロサンゼルス公共図書館、カリフォルニア工科大学図書館を見学することができた。

見学の準備に当たって、まず相手先機関への訪問依頼や打ち合せを行う必要があった。毎晩、英文手紙文例集を右に、英和・和英辞書を左に置いてむりやり英文を作り、主にe-mailで連絡をとった。どの大学の図書館員も大変親切で迅速に対応してくださり、こちらの見学の希望を汲み取ろうとしてくださったのが大変嬉しかった。決して英語が得意でない私にとっては大変な作業だったが、このような準備自体も研修になり意義があったと思う。また、事務諸手続きでは京都大学後援会、国際交流課の皆様をはじめ、附属図書館の関係者一同に大変お世話になった。紙面を借りてお礼を言いたい。

2. スタンフォード大学図書館の概要

スタンフォード大学は1891年に創立された私立大学である。研究図書館であるGreen Library、学部生用図書館のMeyer Libraryと分館が13あり、他にHoover Institution Library and Archives等の5つの図書館がある。スタッフは合計560人を超え、蔵書数は図書資料約670万冊、他資料9,830万点にのぼる。

組織はStanford University Libraries (=SUL) といういわゆる図書館組織のほかに、学術研究を技術的に支えるAcademic Information Re-

sources (=AIR) という部署があり、この二つが一体となって教育・研究活動を支援している。このAIRの下にあるコンピュータサービス機関とその施設の幾つかがMeyer Libraryに置かれており、情報処理教育の一翼を担っている。

私は今回、Green Library, Meyer Library, Music Library および Archive of Recorded Sound と Engineering Library を訪問することができた。見学申し込みはスタンフォード日本センターを通じて行ない、センターのスカラーであるマリア豊田氏が現地の図書館員の方に連絡をとってくださった。日本センター理事長の今井賢一教授をはじめスタッフの皆様、豊田氏、スタンフォード大学図書館員のAssunta Pisani氏、Karen Nagy氏には特にお世話になった。本当に感謝している。そして当日お会いできた図書館員の皆様に対して心よりのお礼を申し上げたい。

3. ホームページ

まず、各館の見学で共通して印象に残ったことを述べたい。

スタンフォード大学図書館では前述のSUL/AIRという組織全体で非常に整ったホームページを作っている。そこから、OPACやデータベース、電子ジャーナルといった電子資料からの情報、各図書館や各主題に関する情報を効率よく入手することができる。

実際、各図書館を見学した際に、本館・分館にかかわらずどの図書館でも同じページを使って説明をしてくださった。まさに、必要な情報への入口の役割を果たしている。

4. 学部生用図書館

次に、最初に見学した学部生用図書館について報告したい。

Meyer Library は、ビデオ、カセットテープ、レーザーディスク等の各種メディア資料と学生用図書、コンピュータを置いた学部生用のマルチメディア図書館である。夏休み中は午後から開館とのことで、私が見学した午前中は利用者がおらず雰囲気が分からなかったことが少々残念だった。

3階建ての建物の1階にはビデオ等の書棚と貸出カウンター、2階には300台を超すコンピュータ端末が設置されている。図書は3階に置かれている。この見学では主に2階を詳細に案内していただいた。

2階は、前述したコンピュータ関連施設が置かれている。ビデオ・オーディオ視聴覚コーナーのほか、学生が自由に使える端末コーナー、フレキシブル・クラス・ラボ、マルチメディアスタジオ、コンピュータクラスルーム、語学授業用ラボ（改装中）、職員研修用ラボとテクノロジー・サービスデスクがある。単に端末を置くだけでなく、様々な目的に使用されることを想定して各部屋や機器が用意されている。カラスキャナー、ビデオ編集用機器、音楽編集用機器も設置され、まさにマルチメディアに対応しているといえる。コンピュータはマッキントッシュとウィンドウズの両方が置かれていた。広々とした空間に、多くの端末が点在している様子はまさに圧巻であった。

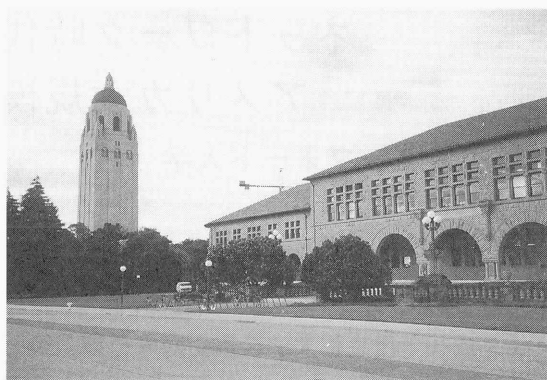
案内していただいた方に端末数が非常に多いですねと感嘆して言ったところ、確かに多いがその分経費がかかると言われていたことが身にしました。

また、機器だけでなく端末台についても配慮がなされていて、例えば学生用の端末台は職員研修用のものよりも横幅の広いものが使われている。

フレキシブル・ラボやマルチメディアスタジオの写真が、以下のWebページに載っているので参照されたい。

<http://rits.stanford.edu/rooms/flexlab/flex-photos1.html>

<http://rits.stanford.edu/atss/at1/vr/index2.html>



5. 研究図書館

次に Green Library を見学した。

この図書館は学術研究用のメインライブラリーで、蔵書は人文社会系を中心に構成されている。また、6000タイトルの雑誌と140タイトルの新聞やマイクロフィルム・コレクションを蔵している。

ここでは主に1階の検索コーナーと参考調査室、2階の書架を見学することができた。

1階入口の左手は目録コーナーとなっていて、検索用端末と目録カードが置かれている。端末は約20～30台あった。一人用のキャレル風の端末台が全面に設置され、スタンディングタイプが目録カードの間に点在していた。

1階中央部には参考調査カウンターがある。その奥に参考図書が置かれており、単体利用のためのCD-ROM検索端末が2台用意されていた。CD-ROMは単体利用のものからネットワーク利用になるべく変更していきたいとのことだった。

利用者からの問い合わせはe-mailでも行われている。ホームページには主題別に参考資料の解説や、e-mailを含む問い合わせ先が案内されている。また、“Ask a Librarian”というWebページには質問票が用意されている（<http://www-sul.stanford.edu/cgi-bin/asklib.cgi>）。

検索結果の印刷に関しては、スタンフォード大学だけでなく後に行った図書館でも、無料で印刷して良いとしている場合は何枚までとの制限を明示していたり、ラインプリンターを置いて

であった。だが、概ねカード式や ID で管理して課金する方式になっていたり、有料化予定という状況で、とにかく有料化する方向が見て取れた。

6. OPAC とデータベース

スタンフォード大学図書館の OPAC は Socrates という名で telnet で提供されている。また Web 版の Socrates II も同時に提供されている。telnet 版は、他のデータベースと同じ画面で利用できることや Socrates II よりも情報量が多いという利点があり、図書館員の方も薦めておられた。ただ、学生は Web 版の方が簡便なので好んでいるとのことだった。

この OPAC の他、各情報検索データベースを提供する FOLIO と、カリフォルニア大学のデータベース MELVYL が利用できる。FOLIO には INSPEC や GeoRef など Z39.50 プロトコルで統一される 25 のデータベースが含まれる。データベースは図書館の館内からの接続でも ID・パスワードが必要なものもある。

また、電子出版プロジェクトとして、High Wire Press の紹介を受けた。これは、理工系の学協会雑誌を電子化して提供する出版事業のことで、全米の大学ではスタンフォードが初めて行なった事業とのことであった。



7. 分館の様子

次に、Music Library と Engineering Library について報告したい。

Music Library は音楽関係の図書・雑誌・楽譜やビデオ・マイクロ資料等の各種資料を収集・提供している。

参考調査は午後数時間のみ行われており、時間外の質問はカウンターにある参考質問用紙に記入しておく。図書館員の方に e-mail での参考質問について伺ったところ、一日に 2~3 件あるが、学外から答えにくい質問もあり、回答に要する時間は様々であるとのことだった。

同じ建物内に Archive of Recorded Sound という部署があり、レコードやオーディオテープの収集、保存、提供を行なっている。古い資料は、利用にあたって職員がテープにとり、そのテープを貸出している。寄贈資料も多く、整理中のレコードが山と積まれていた。

また、蓄音機からレコード、CD に至る再生機器が用意された部屋も見せていただいた。機器の整備は専門業者が行なうらしいが、図書館員もレコード針の交換等を行なうということであった。様々な再生機器を見ていると、デジタル資料に関しても同様に再生機器の保存が必要ではないかとの議論があったことをふと思い出した。

Engineering Library は図書資料のほか、カレントジャーナル 1,800 タイトル、モノグラフ 45,000 冊、学位論文 5,500 冊を所蔵している。学位論文は開架書架に製本されて誰でも見られるようになっている。

図書館 1 階では 9 台の検索用端末のほか、ビデオ再生機器が 20 台設置されており、授業を録画したテープを見ることができる。他に各階にも検索用端末がある。

貸出・返却カウンターは学生アルバイトが行なっていた。アメリカの大学図書館では、一般に昼間の開館時でも貸出・返却カウンター、書庫の入庫チェック、インフォメーション等で学生アルバイトが活躍している。

ところで、MELVYL で所蔵検索から雑誌の全文を見る手順を図書館員に説明していただいた時、ちょうど日本の雑誌があったのでそれを選んでくださったのだが、日本語が文字化けして解読不可能であった。日本語のままで海外に情報発信する難しさを実感する体験だった。

8. 終わりに

スタンフォード大学図書館を見学して非常に

強く感じたことは、とにかく全体的によくまとまっているということだった。それは、開学時の建築様式を大事にして、後から作った建築物も同じ様式で建てるという大学の方針にも象徴されているように感じた。

スタンフォード大学では、総勢8名のスタッフの方にご説明いただいた。皆さん、説明の途中で何度も質問する機会をくださったのが嬉しくも苦しい体験だった。とっさに質問はないかと言われて英語が出ず困ったり、施設の素晴ら

しさに圧倒されて日本語さえ浮かばなかったりもした。

誌面の都合で報告できなかったことが多々あるが、Web ページ上でスタッフの報告書や講演記録等の様々な情報が公開されているので、ぜひ一度ご覧いただきたい。そして、私の理解の誤りをご指摘くだされば幸いである。

(やまなか せつこ)

(スタンフォード大学図書館

<http://www-sul.stanford.edu/>)

総合人間学部図書館紹介 —シリーズ「京都大学図書室巡り」

総合人間学部は、京都大学で一番若い学部です。平成4年度までは教養部でしたので、図書館は教養部図書館として教養部生に親しまれていました。しかし、学部となった現在でも総合人間学部図書館は全学の利用者に開かれた図書館であることは変わっていません。入館して本を借り出すための利用証(学生証)は附属図書館と同じものですし、全学共通科目用の参考になる図書等、約5万冊を1階の開架閲覧室で自由に手にとって見られる様に提供しています。

また、1階の開架室にはそのほかに「学部図書コーナー」があり、総合人間学部の教官が各自の専門分野に密着した推薦書を選定して配架しています。人文・社会系、数理系の新しいユニークなコレクションとなっています。国際文化学科のコーナなどには洋書も多数配架しています。これらの新刊書も勿論、全学の誰でも借り出すことができます。貸し出しを受けられる冊数は附属図書館とは別に学部生は5冊2週間、院生は10冊1ヶ月借り出せます。更に書庫には約20万冊の図書、雑誌があり、これらも学部生5冊2週間、院生30冊を1ヶ月以内で借り出

すことができます。

他に1階には視聴覚室があり、語学学習用のテープを聞くことができます。また、38ヵ国語の語学テープは一晩だけの館外借り出しができます。

学部としては一番若くても、歴史的には第三高等学校を継承しています。特殊な資料として舎密局から三高にいたる貴重な文書類を三高資料室に保管し、公開しています。

総合人間学部図書館の他に各研究室には約37万冊の研究用図書・雑誌があります。これらの図書の利用については、総合人間学部図書館の1階カウンターでご相談ください。総合人間学部研究室図書室では相互利用証を持参していただくと借り出しができる場所もありますので、総合人間学部以外の学部の方は所属なさっている部局の図書館(室)にご相談ください。

舎密局から第三高等学校、教養部、総合人間学部と変身し、また人間・環境学研究科とも密接な若い学部のユニークな蔵書を有効に利用してください。

(総合人間学部参考調査掛長 堤 美智子)